

# 火花

第 53 号

1986, 1

1986年1月  
第53号

# 火花

第53号 1986, 1

共産主義者同盟(火花)

◎ 戦争と革命の歴史的考察

P 1

◎ 一〇、二〇闘争がきっかけしたもの

P 16

◎ 研究ノート  
ロシア社会民主労働党ブラハ全党協議会

トはなんであつたか P 22  
レーニンの組織・戦術の復権のために

◎ 火花総目次

P 25

## 戦争と革命の歴史的考察

はじめに

現在、様々な資本主義的危機の深化および階級情勢のつまりりの中で、戦争と革命の問題は、ますます重要性を獲得してきている。それゆえ、最大限に科学的態度をもって、この問題を研究し、実践に着手することが、われわれ革命家には求められている。しかるに、日本革命運動の隊列では、相変わらず科学的態度とは無縁な主観主義がはびこっている。

戦争と革命の問題を意識的にとりあげ、宣伝・扇動・組織の中心にすえんとしているのは、中核派や戦旗派(西田、日向)である。彼らは、「戦争国家化粉碎」「帝国主義戦争を内乱へ」のスローガンをもって、階級闘争の現実接近せんとしている。もちろん、一般的に言えば、それがすべて誤っているわけではない。

しかし、このスローガンの基本認識であるところの、戦後の日本が戦争とは無縁であり、これから「戦争国家体制」をつくって、戦争に突き進もうとしている、というのはまったく一面的である。なぜならこうである。日本は、朝鮮戦争、ベトナム戦争などに直接的

に加担してきたし、強力な陸・海・空軍で武装してきた。そして、現在、自衛隊派兵を行っていないとはいえず、国際帝国主義の一つとして、アジア、アフリカ、中南米などのプロレタリアート・人民に対する反革命戦争にかかわっている。日本は、常備軍としての自衛隊を組織した段階から「戦争国家」の能力を持っているのである。今日の軍拡・反革命国家体制の強化は、日帝が世界の戦争と革命にかかわっていることに規定されて進められているのである(もとより、経済的背景がある)。われわれは、社共がふりまいてきた特殊日本の「平和と民主主義」の眼で現実に接近する態度をそろそろやめなければならぬ。

言うまでもなく、日本のプロレタリアートは、帝国主義の軍拡・反革命・侵略・民族抑圧の一切の政策に反対する必要がある。ただし、その際、日本帝国主義政府とブルジョアジーに対する革命的行動を促進し、発展さす見地から反対することが必要である。日本帝国主義政府とブルジョアジーに対する革命的行動のためには、帝国主義に対する国際的共同行動、プロレタリアートのすべての革命闘

争の支持、自衛隊（米軍）、警察、官僚機構の解体、党の戦闘活動、非合法組織などが不可欠である。これが、われわれにとっての「内乱」の道である。

われわれは、この原則にもとづく革命的政闘争について、「火花」第四号（「革命的政闘争とはどのようなものでなければならぬか」）で提起してきた。そして、かかる見地から一貫した宣伝・扇動・組織活動を展開してきた。今回のわれわれの作業は、それを別の角度から鮮明にするために、戦争と革命の問題を歴史的に考察することにある。

この作業をわれわれは、マルクス・レーニン・毛沢東などの革命的態度を復権する形式で行う。それは、戦争と革命の問題における一切の主観主義と闘争するためである。このため、作業を長い引用なしにすますことは不可能である。あらかじめ、以上の点をことわった上で、目的にしたがって本論に入っていくことにする。

## I 経済と戦争と軍隊

### 1 封建時代の戦争とブルジョア革命後の戦争

#### ① 封建時代の戦争の特徴

戦争、軍事的諸要素が、その時々々の経済状態に規定されることを最初に明らかにしたのは、エンゲルスである。

「ほかならぬ、この軍隊と艦隊ほど経済的前提条件に依存するものは他にはないのである。武装、構成、編成、戦術、戦略は、

なによりもまず、そのときどきの生産の段階と交通、通信とに依存する」（『反デューリング論』岩波文庫P四〇）。

エンゲルスの総括によれば、中世封建社会の戦争では、その時の経済的社会制度（農奴制）に規定されて、封建諸侯や絶対君主の利害にもとづく、示威行為を特徴としている。

当時の軍事費は、支配者の私経済によってまかなわれた。戦争、軍務は、貴族（士）身分の特権である。人足、雇兵を除けば、戦争へ動員大衆を動員することはなかった。軍事と生活は分離していかつたのである。戦争指導も、与えられた条件のもとでの相対的方針であり、軍事費がなくなると退却し、あとは外交官にまかせるパターンが主であった。

このように、封建時代の戦争は、職業的常備軍による示威行為を基本としており、その費用も支配者の「私的」財源によってまかなわれ、勝敗も動員大衆とは相対的無関係に推移するものだったのである。

#### ② ブルジョア革命後の戦争の特徴

ブルジョア革命は、国民経済を創出し、統一された民族国家を創出した。（一八世紀後半から一九世紀前半のヨーロッパ）。と同時に、戦争は「国民戦争」が一般的となった。すなわち、近代国家に統一された国民の利害に動機をもつものになったのである（例えば一八六六年および一八七〇年一七一年のプロシヤ・フランス戦争）。軍事費は国民全体から税によってまかなわれるようになり、兵士を広く動員大衆より徴兵するようになる（国民志願制＝義務兵あるいは一般義務兵役制）。兵士は、市民生活の外に隔離され、兵營の

なかで、集団的規律をたたきこまれるようになった。

戦争指導における変化は、相対的戦争から「絶対戦争」（暴力の無限的行使）への転化である。また、これによって、ゲリラ戦、パルチザン戦の意義が特有に生れてきたのである。（動員、時空の利用の問題）。

### 2 用兵とプロレタリアートの軍事

#### ① 近代の用兵、作戦

近代の用兵、作戦を完成させたのは、フランス革命とその継続としての解放戦争（のちに侵略戦争に転化）におけるナポレオンである。それは二つの点からなっている。「人間、馬、火炮といった攻撃手段の大量性ならびにこの攻撃手段の機動性がそれである」（エンゲルス『一八五二年における革命的フランスにたいする神聖同盟の戦争の諸条件と見直し』）。

機動性と集団性とは、フランス革命の産物であった。

「攻撃手段の大量性（集団性）は、より高い文明的段階の必然的結果である。そしてとくに武装集団の全人口にたいする現代的比例は、解放されたブルジョアにまで達しない段階にあるどんな社会状態とも両立しがたい。だから現代的用兵はブルジョアと農民の解放を前提とする」（同）。

ブルジョアと分割地農民との社会的、政治的解放を抜きには、攻撃手段の大量性はありえないのである。また、機動性（運動性）に不可欠な武器、弾薬、食糧などの増強、教養ある将校の必要数の

提供、兵士自身に必要な知性を保障するのは、かかる解放とそこで生産力の発展である。

ナポレオンは、大量性と機動性をもって、旧来の「横隊戦術」を「散兵と縦隊戦術の結合」（のちに横隊戦術との結合）へと変化したのである。これは、その後（例えば第一次世界大戦）継承された。

以上がエンゲルスのナポレオンの用兵、作戦、すなわち近代の用兵、作戦に対する評価である。

#### ② プロレタリア軍事科学

近代の用兵における大量性、機動性（そこにおけるブルジョア的、分割地農民の解放と生産力、技術の飛躍的発展）はプロレタリアートの戦争をも規定づける。エンゲルスは「革命は一般的な現代的用兵の手段と方法をもって戦争を遂行しなくてはならないだろう。……革命は現代的戦争手段と現代的兵術をもって、現代的戦争手段と現代的兵術を相手にして戦わなければならないだろう」（同）と述べている。彼は、それを次のように提起している。

「軍事科学におけるナポレオンのすばらしい諸発見は、奇跡だといつてかたづけられない。革命とナポレオンによってつくりだされた軍事科学は、新しい社会諸関係の必然的産物でなければならぬ。しかし、産業にとって、プロレタリア革命においては蒸気機関の廃止ではなく、その増加が問題となるように、用兵にとつても集団性と機動性を減じるのではなく、高度化するものが、問題である」（同）。

エンゲルスのこの考え方は、ロシア革命や中国、ベトナムなどの

民族解放闘争に生かされたといえよう。

### ③ 軍国主義の発展と解体の可能性

エンゲルスは『反デューリング論』で軍国主義と闘争し、軍隊を革命の側へ獲得していくうえで視点を提起している。

「この戦争（プロシヤ・フランス戦争：引用者）の結果、大陸のすべての大国は否応なしにプロイセン式の在郷軍制度をもっと強化した形で、自国に採用し、そしてそれとともに、数年のうちに滅亡するほかないほどの軍事負担をせおいこむことになった。軍隊は国家の主要な目的となり、自己目的となつてゐる。諸国の人民はわずかに兵士を供給し、かつ養うために存在しているにすぎないのである。軍国主義はヨーロッパを支配し、のみこんでいる。しかし、この軍国主義は自己のうちに自己の没落の萌芽をも担っている。各国相互の競争のために、各国は否応なしに、一方では、年々ますます多くの金を陸軍、海軍、大砲等々のために使い、そのため財政的破綻をますます早めることになつてゐるし、また他方では、一般兵役義務をいよいよ真剣に実施して、それによつてついに全人民を武器の使用に習熟させざるをえないはめになり、それがため、ある一定の瞬間がくれば、指揮権をにぎっている軍の高位のお歴々にさからつて、全人民が自分の意志を押しとおすことができるようにしてゐる。そして人民大衆―農村や都市の労働者と農民―が一つの意志をもてば、すぐさまその瞬間がくる」

エンゲルスは、ここでブルジョア国家における軍国主義の不可避性を述べた後、その解体の可能性として二つのことをあげている。

第一には財政的破綻、第二には勤労大衆に武器の使用を習熟さすことである。この主張を、われわれは注意深く確認しておかねばならぬ。

### ④ プロレタリアートの武装

ブルジョア軍隊は主として、被抑圧大衆の出身者によつて構成される。したがつて、エンゲルスのいうように、勤労大衆に武器の使用を習熟させる。しかし、これはブルジョア軍隊が武装した勤労大衆の中に解消されるといふことではない。実際は、徴兵された勤労大衆はプロレタリアートを抑圧する道具に組み込まれ、プロレタリアートに対抗して武装させられる。

マルクス・エンゲルスはブルジョア軍隊のかかる階級性を見抜いていた。だから、ブルジョア革命の時期においても、プロレタリアートは、ブルジョア党に対して独自の党をつくり、武装しなければならぬと強調したのである。彼らは、一八五〇年ドイツ共産主義者にあつた「共産主義者同盟への中央委員会の呼びかけ」では次のように訴えている。

「要するに、勝利に最初の瞬間から、不信はもはや敗北した反動的政党にたいしてではなしに、むしろそのいままでの盟友にたいし、共同の勝利をひとり占めしようとしてゐる党派にたいして、むけられなければならないのである。しかし、勝利の最初の瞬間から労働者をうらぎりはじめるのであるこの党にたいして、精神的に、かつ威嚇的に対抗できるためには、労働者は武装し、かつ組織されていなければならない。すい発銃、銃、大砲、弾薬をもつてする全プロレタリアートの武装が即時

実行されなければならない」（『共産党宣言』）。

この教えを忠実に実行したのがレーニンであつたことをわれわれは知つてゐる。

## Ⅱ 民族戦争と敗戦主義

### 1 一八四八年から一八六六年にいたるまでの民族戦争

マルクス・エンゲルスはこの時期、ロシアツァーリズムおよび、その同盟者に対するドイツをいし、ヨーロッパの民族戦争を支持した。それは、「ロシアは徹底して征服的な国民であり、一七八九年の大運動（フランス革命：引用者）が旺盛な力にみちたおそるべき敵をロシアに対して生み出すまでは、一世紀全体にわたつてそうであつた。この敵とはヨーロッパ革命のことであり、民主主義思想の爆発力と人類天賦の自由への渴望のことである。その時以来、ヨーロッパ大陸には、事実上、二つの権力しかなかった。―絶対主義のロシアと民主主義の革命とがそれである」（M・田全集第九巻）という情勢のものであつた。

情勢がこうであつたから、彼らは、大陸（ヨーロッパ）の革命運動を防衛し、プロレタリアートの階級闘争を進展さすという見地から、そのためにこそ「ロシアと闘う必要がある」と考えたのだ。また、彼らがスペイン人民の革命（一八五〇年―五一年）やポイランド人民の蜂起（一八六三年）などを支持したのも、かかる見地からである。だからこそ、彼らは一八六〇年にロシアで領主に対する農

民（農奴）の蜂起がはじまると、「われわれはロシアの農奴という盟友を得た」と強調した。

見ての通りマルクス・エンゲルスは、一八四八年から一八六六年の時期においても、民族戦争一般を支持したわけではなく、特定の（つまり、封建制度、絶対主義、外国の圧政に対する）民族戦争を支持したのである。

### 2 一八六六年のプロシヤ・オーストリア戦争における敗戦主義

この時期、ロシアにおいて資本主義が始つた。それは、革命運動の開始をも意味した。このことは、ロシアに対するヨーロッパの民主主義革命の防衛というスローガンを後退させる。また第一インターナショナルが結成され、活動を開始した。第一インターナショナルは、ロシアの絶対主義に対するドイツ（ヨーロッパ）の民主主義革命の防衛がいえる限りではロシアに対する民族戦争を支持したが、一八六六年のプロシヤ・オーストリア戦争以降は、国際連帯活動と敗戦主義のスローガンも提起されていった。

プロシヤ・オーストリア戦争は、王家間の（ホーエンツォレルン家とハプスブルグ家）利益の獲得戦争であつた。第一インターナショナルは、この戦争に対し、次のとき態度をとつた。

「国際的労働者協議会総評議会は、大陸における現在の戦争を、諸政府間の戦争とみるとともに、労働者が中立を維持して目的のためにお互いに結合し、その結合を通じて力を獲得するとともにこの獲得された力をかれらの社会的・政治的解放を達成す

るために使用することを勧告する」(一九一八年六月七日付、決議)。

第一インターナショナルは、戦争を政府、つまり労働者に対する支配者の間のものととらえ、中立、したがって反戦を立場として、目的(社会的政治的解放)のためにお互いに結合することを提案している。そして、かかる結合による力を、自分を解放する階級闘争のために使用することを勧告している。

ここでしめされたプロレタリア国際主義の原則は、その後、国際共産主義運動の基調となっていた。

### 3 一八七〇年と七一年のプロシヤ

#### フランス戦争とパリ・コミューン

##### ① 戦争と第一インターナショナル

この戦争は、ドイツに対する「ボナパルト派の侵略」から始った。第一インターナショナルのバリの会員たちは、ただちに「万国の労働者にあたる」宣言を発表し、戦争の性格を「覇権や一王朝のための戦争」ととらえた上で、フランス、ドイツ、スペインの労働者諸君ノ声を合せていっせいに戦争排撃の叫びをあげよう」と呼びかけた。第一インター「フランス」プロイセン戦争についての第一の呼びかけ(一八七〇年七月)は、「これらの抗議は、フランスの労働者の真の感情を言いあらわして」と評価している(マルクス「フランスにおける内乱」)

ドトツの労働者はフランスの労働者に応えた。「七月一日ブラウンシュヴァイクでひらかれた労働者の大衆集会は、バリの宣言に

完全に同意することを表明し、フランスにたいする民族的敵対という考え方を拒否して、次のようなことばでその決議を結んだ。『われわれは、あらゆる戦争の敵であるが、とりわけ王朝戦争の敵である。……深い悲しみと痛恨の念をいだきながら、われわれは避けられない害悪としての防衛戦争をおこなわなければならなくなっている。しかし、それと同時に、われわれは、平和と戦争の問題を決定する権能を諸国人民自身にあてるよう要求することにより、そして人民を自分自身の運命の支配者とすることによって、このような重大な社会的不幸がふたたび繰り返されないようにすることをドイツの労働者階級全体に呼びかけるものである』(同P三二―三三)。

第一インターナショナルは、「ドイツの側についてみれば、この戦争は防衛戦争である」ことを認めた。しかし、「現在の戦争がその厳密に防衛的な性格をなくしてフランス人民にたいする戦争に墮落する」可能性についても警告している。同時に、「国内の人民の反対を押しつぶして、ドイツをホーエンツォレルン王朝に併合するためこのルイ・ボナパルトその人と共謀したのは」プロイセンであり、ビスマルクであることを暴露した。

七〇年九月の「第二の呼びかけ」は、ドイツの「防衛戦争は、実際上、ルイ・ボナパルトの投降、スタンの降伏、パリにおける共和制の宣言をもって終わった」(同P三八)ことを明らかにしている。そして、アルザスとローレーヌの併合を、ドイツのフランスに対する侵略として弾劾したのである。

プロイセンフランス戦争についての第一インターナショナルの二つの呼びかけは、こうして、戦争を絶滅させることができるのは

万国の労働者階級の同盟と共同行動であることを公然と提起したのである。そして、戦争がつくり出す条件を、かかる闘争のために利用する戦術を提起した。『第二の呼びかけは「各国の国際労働者協会支部は、労働者階級をばげまして、行動に立たせよ」を最後に呼びかけて終っている。

##### ② パリ・コミューン

ボナパルトのプロシヤに対する敗北は、九月、パリでの共和制の宣言となった。しかし、この共和制は、王座をくつがえしたのではなく、それが空席となったあとがまに座っただけのブルジョア的なものである。だから、ブルジョア政府と武装したプロレタリアートの対立・爆発へと発展した。

七一年一月、パリは降伏した。諸ほ墨は明けわたされ、囲壁の武装は撤去され、戦列軍と遊動国民軍の武器は引き渡され、それらの部隊そのものは捕虜と見なされた。しかし、国民軍の労働者大衆は武装したまま、プロシヤ軍・有産階級(大地主、資本家)と対峙した。ベルサイユを本拠とするブルジョア政府は労働者の武装解除を試みるが失敗する。バリの労働者とベルサイユの政府との間に宣戦が布告された。三月二十六日、パリ・コミューンが選挙され、二八日にその成立が宣言された。コミューンは、徴兵制と常備軍を廃止して、兵役に耐えるすべての市民の属すべき国民軍を唯一の武装力とした。また、すべての官吏の選挙制、解任制と労働者なみの給料、教会の国家からの分離、無料教育などを実施した。パリ・コミューンとベルサイユ政府との間に内乱がはじまる。内乱は、五月二一日(二八日の流血の一週間を頂点にして)コミューン側が敗北する。

マルクスは、七〇年九月に、共和制のブルジョア性を暴露すると同時に、蜂起の条件はないとし、労働者の独自の組織づくりを呼びかけた(『第二の呼びかけ』)。しかし、コミューンが生れ、内乱が始ると「なんとという柔軟性、なんとという歴史的創意、なんとという自己犠牲の能力」「歴史上にこれほどの偉大さのこれほどの実例は一つもない」(『クーゲルマンへの手紙』)と最大限の評価を与え、支持した。ちなみに、彼がコミューンの誤りとして指摘したのは銀行を接収しなかったことや、すぐにベルサイユに進撃しなかったことなどである。

#### 4 日露戦争とツァーリズムの敗北

##### ① 反戦・平和について

日露戦争に対する態度をきめる際、レーニンがマルクス・エンゲルスに学んだことは、彼自身が多くの所で語っている。彼は、この戦争期において、マルクス・エンゲルスの態度を完全に自己のものとして提起している。

「革命的プロレタリアートは、戦争反対の扇動を倦むことなく行なわなければならないが、そのさい、一般に階級支配が存続しているかぎり戦争は除去されえないことを、つねに記憶していなければならない」(『全第八巻P三九』)。

レーニンは、階級支配を絶滅させることが戦争を除去する道だという見地から、反戦の扇動を行わなければならない、としている。これが第一である。第二には次である。

「戦争によってひき起された経済的、政治的危機を人民の奮気

のために利用し、それによって資本主義的階級支配を排除することにより全力を挙げて努力すること」(『全集第十三巻』)。

すなわち、第二の点は、戦争によってひき起された経済的、政治的危機を、ブルジョアジーの打倒、収奪のために利用する、ということにある。

したがって、第三に平和の問題についても、階級的立場を貫徹した。レーニンは、社会革命派やメンシェビキが「ゼがひでも平和」というスローガンを掲げたことに対して、次のように主張している。

「『ゼがひでも平和』というスローガンをかかげてはならない。かかげるべきスローガンは、専制の没落をともなう平和、解放された人民によって、自由な憲法制定会議によって締結される平和であり、すなわち、どんな犠牲を払ってでもの平和ではなく、もっぱら絶対主義の打倒を代価とする平和でなければならぬ」(『全集第八巻P二六七』『ヨーロッパ資本と専制』)。

レーニンは、無条件の平和ではなく、絶対主義の打倒を代価とする平和を要求したのである。ここには一点の曖昧さもない。

### ② ツアーの敗北についての評価

レーニンは、ツアリズムが引きつづきヨーロッパの反動的皆でありつづけていた当時の情勢を考慮して、日本の役割とツアリズムの敗北を評価した。

「プロレタリアートは、戦争に反対してたたかっており、将来もつねに断固としてたたかうであろうが、しかしそのさい、階級支配が存続しているばあいには、戦争を民主主義的にモンテメンタルな見地からだけ評価してはならないということ、

搾取民族間の戦争では、あれこれの民族の進歩的ブルジョアジーと反動的ブルジョアジーの役割を区別しなければならぬということを、一瞬もわすれなさいのである」(同P二六六)。

この一般命題を、日露戦争に適用して、彼は次のように主張している。

「すずんだ国とおくれた国との戦争は、すでにいくたびか歴史上にあったように、こんども偉大な革命的役割を演じた。そして、戦争—あらゆる階級支配一般の必然的取りのぞきえない同伴物—の仮借することのない敵である自覚したプロレタリアートは、専制を壊滅させた日本のブルジョアジーがはたしているこの革命的任務に、目をふさぐことはできない」(『旅順の陥落』同P三八)。

これは、ロシアのプロレタリアートから見た評価である。たしかに、アジアでのヨーロッパ・ロシアの圧制に対する闘争者として登場したかぎりでは、日本のブルジョアジーは進歩的であった。しかし、日本はすでにこの当時、英帝と同盟し、アジアでの今一つの侵略者としても登場していた。だから、レーニンのいう日本の革命的役割はただツアーを敗北させたという点にだけあったのであり、他のすべての行為は反動的、侵略的である。

レーニンにとって問題だったのは、ロシアにおいて革命を起すことである。それは、彼が日本の革命的役割を評価したあと、「恥ずべき敗北に陥ったのは、ロシア人民ではなく、専制である。ロシア人民は専制の敗北によって利益を得た。旅順の降伏はツアリズムの降伏の序幕である。戦争はまだだけつしておわっていないが、戦争が継続すれば、それだけロシアの人民のなかでの動揺と憤激はかき

ぎりなく拡大し、新しい偉大な戦争、専制にたいする人民の戦争、自由のためのプロレタリアートの戦争の時機は近づいている」(同P四〇〇)と述べていることから明らかである。

## III 戦争に対するレーニンの態度

### 1 歴史上・経済上からする区分と

#### 社会排外主義との闘争

一九世紀末から二〇世紀にかけて、歴史は資本主義の独占的段階としての帝国主義時代に入った。すなわち「(一)経済生活のなかで決定的役割を演じている独占を創り出したほどに高度の発展段階に達した生産と資本の集積、(二)銀行資本と産業資本との融合と、この「金融資本」を土台とする金融寡頭制の成立、(三)商品輸出と区別される資本輸出がとくに重要な意義を獲得すること、(四)国際的な資本家の独占体が形成されて世界を分割していること、(五)最大の資本主義的強国による地球上の領土的分割が完了していること。帝国主義とは独占と金融資本との支配が成立し、資本の輸出が顕著な意義を獲得し、国際トラストによる世界の分割がはじまり、最大の資本主義国による地球上の全領土の分割が完了したというような発展段階における資本主義である」(レーニン『帝国主義論』)の時代である。

政治的に見れば、封建制度と絶対主義とに対する闘争、すなわち、自らを解放しつつあるブルジョアジーの政治から、帝国主義的な、すなわち、全世界を略奪し、反動的、封建的領主と同盟してプロレタリアートを抑圧している政治への転換である。かくて、一九一四

年、帝国主義列強間の二つのグループ間の世界戦争(第一次世界大戦)が勃発した。

当時ヨーロッパでは、ブルジョア民主主義革命の時代の民族戦争(一七八九年—一八七一年)の際のマルクス・エンゲルスの態度(封建制度、絶対主義、外国の圧制に対する民族戦争の評価)を、帝国主義時代の戦争にも適用し、「祖国擁護」を主張する思想がはびこっていた。この思想こそは、帝国主義国においては排外主義に帰結したのである。レーニンは、戦争を歴史上、経済上の条件を区分しておさえることで、彼らと闘争した。

「一七八九—一八七一年の時期は、深い傷痕と革命との思い出を残した。封建制度、絶対主義、外国の圧制が打倒されるまでは、社会主義をめざすプロレタリア闘争の発展というものは問題にならなかつた。社会主義者が、このような時期の戦争に関して「防衛戦争」の正当性を云々する場合、それはつねに、中世と農奴制とに反対する革命に帰着するような目的がまさに念頭にあったのである。社会主義者は、「防衛」戦争という言葉を用いて、つねにこの意味での「正義の」戦争のこととして理解してきた。このような意味の場合にだけ、社会主義者は、「祖国擁護」あるいは「防衛」戦争の正当性、進歩性、正義性を過去において認めてきたし、現在も認めている。……だが、一〇〇人の奴隷を持っている奴隷所有者が、二〇〇人の奴隷を持っている奴隷所有者に対してより「正当」な奴隷再分配のために戦っていることを考えてみたまえ。こういう場合に、「防衛戦争」とか「祖国擁護」といった概念を使うことは、歴史的に間違っており、実践的には狡猾な奴隷所有者が庶民、俗人、無知

人々をあざむくものでしかないであろう。それと同じように、今日の帝国主義的ブルジョアジーは、奴隷制の強化をめざす奴隷所有者間の現在の戦争において、「民族的」イデオロギーや祖国擁護といった概念によって、人民をあざむいているのである」（『社会主義と戦争』〔全第二一巻P三〇六〕。「ブルジョアジストが進歩的だった時代の戦争にたいするマルクスの態度を今日引き合いにだしながら、「労働者は祖国をもたない」というマルクスのことば、まさにブルジョアジーが反動化し、その寿命のつきた時代、社会主義革命の時代にあてはまるこのことばを忘れるものは、マルクスを恥知らずに歪曲し、社会主義の見地をブルジョアジーの見地にすりかえるものである」（同P三一六）。

みてのとりである。レーニンは、ブルジョア革命の時代の「防衛戦争」の評価を、帝国主義時代、すなわち、「世界の略奪者のあいだの戦争」の時代に適用することの誤りを明らかにしている。そして、ブルジョアジーが反動化し、「社会主義革命」の時代には「祖国擁護」ではなく、「労働者は祖国をもたない」という言葉こそ重要だと述べている。これが、排外主義と闘う上での視点の重要な一つである。

## 2 民族闘争の不可避性

では、レーニンは、帝国主義時代の民族戦争をすべて否定したのか。否である。これは、ローザ・ルクセンブルクと対比してみれば明らかである。

カウツキーなどドイツの社会民主主義者の少ない部分だが、社会排外主義に転落していったのに対し、勇敢に闘った一人がローザ

である。彼女は、戦争が帝国主義戦争であることを暴露することによって排外主義者と闘争した。

その際、彼女は、現在の戦争が帝国主義戦争であるということから「帝国主義時代にはもはや民族戦争はありえない」との命題を提起した。彼女の論拠は、「現在ではどんな戦争も、かりに最初は民族戦争であっても帝国主義諸国のうちのある一国、もしくはは帝国主義諸国連合の利害に触れるため、帝国主義戦争に転化する」とするものである。

これに対して、レーニンは、「マルクス主義的弁証法の基本命題は、自然および社会ではすべての限界は条件的であり可動的であって、一定の諸条件のもとでその対立物に転化しえないような現象は一つもない。民族戦争は帝国主義戦争に転化しうるし、その逆もあろう」（『エニウスの小冊子について』〔全第二二巻P三五八〕）という。そして「われわれは、あらゆる転化一般の可能性を否定することによってではなく、あたえられたものをその環境のなかで、またその発展のなかで具体的に分析することによって、論弁哲学とたたかう」（同）とする。レーニンの意見はこうである。

「二十世紀、この「ほしほしままな帝国主義」の世紀の歴史は、植民地戦争に満ちている。しかし世界の大多数の民族の抑圧者であるわれわれヨーロッパ人が、われわれにもちまえる卑劣なヨーロッパ的排外主義から「植民地戦争」と呼んでいるものは、これら被抑圧民族の民族戦争または民族の蜂起であることがしばしばある。帝国主義のもつとも基本的な特性の一つは、帝国主義がもつともおくれた国々で資本主義の発展をはやめ、そうすることで民族的抑圧にたいする闘争を拡大し激化させるとい

うこと、まさにこのことにある。これは事実である。そして、このことから不可避的にてくことは、帝国主義はかならず民族戦争をしばしば生み出すということである」（『プロレタリア革命の軍事綱領』〔全第二三巻P八一〕）。

この民族戦争が帝国主義列強間の戦争に転化するかどうかは前もって決定できない（それは多くの事情にかかっている）。

ローザは、彼女のように「民族戦争はありえない」とすることは、帝国主義に対する進歩的、革命的な民族戦争（民族解放闘争）の否定になるということだ。レーニンは「帝国主義のもとでの民族戦争の可能性をいっさい否定することは、理論的には正しくなく、歴史的には明らかにまちがっており、実践的にはヨーロッパ的排外主義に等しい（同）と述べたのは正しい。われわれは、彼女の誤りが、四〇年後にフルシチョフによって「いかなる民族解放闘争も核戦争になる」という反動的主張として再生産されたことを知っている。

## 3 政治の継続としての戦争

歴史上、経済上の条件から戦争をとらえるということは、「戦争はどのような階級の性格をおびているか」「それを遂行しているのはどの階級か」ということを今一つの重要視点として要求する。これは、戦争が勃発しても政治の性格が変わるわけではない、という問題としてある。すなわち、それぞれの戦争をその時代の当該の関係諸国およびそれらの国内部のいろいろな階級の政治の継続とみなければならぬのである。

「戦争は別の手段による政治の継続である。どんな戦争もそれ

を生んだ政治と不可分に結びついている。ある大国、その大国

内のある階級が戦争をまえに長いあいだとってきた、まさにその政治を、同じこの階級が、ただ行動形態をかえただけで、戦時中もとりつづけることは不可避である」（『戦争と革命』〔全第二四巻P四二四〕）。

二〇世紀の帝国主義戦争は、労働者を経済的に隷属さす賃金奴隷制度を基礎とし、プロレタリアート・人民に対して武装して金融資本の利益を擁護し、植民地や他国を略奪し、抑圧する政治の継続である。したがって、帝国主義戦争とは、「世界支配から生ずる利益の分配をめぐって、金融資本のための市場をめぐって、弱小民族の従属化などをめぐって資本家がおこなっている戦争」である。

とすれば、プロレタリアートが帝国主義戦争に反対することは、帝国主義戦争において貫徹している資本家の政治に反対することが要求され、資本主義・帝国主義そのものを打倒する政治である。まさに、帝国主義戦争に對置できるのは、資本家と抑圧者を打倒する政治、帝国主義の反動、民族抑圧、併合に反対する政治の継続としての革命戦争である。

## 4 階級闘争の継続としての内乱

### ① 戦時における階級闘争の継続としての内乱

レーニンは、「帝国主義戦争を内乱へ転化せよ」というスローガンを提起する際、「革命的な社会民主主義派の任務は、革命が急テンポで発展する場合にも、危機が長びく場合にも、長期にわたる日常

活動を放棄せず、階級闘争のこれまでの方法をどれひとつ軽視しないことである」(『ロシア社会民主党在外支部決議』全第二一巻P一五四)と強調している。そして、「このような転化の困難がある時期にどんなに大きくみえようとも、社会主義者は、戦争が事実となった以上、この方向をめざして系統的にねばり強く、ひたむきに準備活動をすすめることはけつしてやめないだろう」(『戦争とロシア社会民主党』全第二一巻P二〇)とした。つまり、レーニンは、戦争以前の長期にわたる日常活動を、戦時においても継続することは「内乱」をおこなうことだと主張しているのである。

#### ② 階級闘争の発展としての内乱についてのレーニンの規定

「内乱は、あらゆる種類の階級社会で、階級闘争の自然な、また一定の諸事情のもとでは不可避な継続、発展、激化である」(『プロレタリア革命の軍事綱領』全第二三巻P八二)。

「尖鋭化した経済的政治的危機の一定の時期においては、階級闘争は、直接的な内乱すなわち人民の二つの部分の間の武装闘争にまで成熟する」(『バルチザン闘争』全第十一巻P二二三)。

### IV 「帝国主義戦争を内乱へ転化せよ」について

#### 1 危機の革命的利用と「自」国政府の敗北

##### ① 危機の革命的利用

パーゼル宣言は、戦争が起った場合には、社会主義者は戦争によってつくりだされる「経済のおよび政治的危機」を「資本主義の没落を早める」ために利用しなければならぬ、としている。すなわち、戦争によって生じる諸国政府の困難と大衆の憤激を、資本主義の打倒(「社会主義革命」)のために利用する戦術である。したがって、パーゼル宣言を継承した「帝国主義戦争を内乱へ転化せよ」こそ、戦争が勃発した情勢のもとで、「社会主義革命」を防衛する正しいスローガンである。

このスローガンにおける、危機の革命的利用の問題についても少し見ておくことにする。

「戦争は最大の危機である。あらゆる危機は、(一時的な停滯と逆行はありうるが)、α 発展の促進、β 諸矛盾の激化、γ それらを明らかにすること、δ すべて腐朽したものの等々の崩壊、を意味する」(『メーデーと戦争』全第三六巻P三六四)

一般的に戦争は、交戦国のすべての勤労大衆に、前代未聞の惨禍災厄、零落、貧困、飢餓をつくり出す。ことから労働者大衆の帝国主義に対する革命的気分、行動が生れる。これが一つである。今一つはこうである。

「戦争は、いまでは国民によって行われるのであり、だから、現在では戦争のつぎのような大きな特性がとくにはつきり現れてくる。それは、いままではごく少数の自覚した人々にしかわかっていなかった、人民と政府との不一致を、数千万の人々のまえに現実に暴露するということである」(『旅順の陥落』全第八巻P三六)。

レーニンとボルシェビキの「帝国主義戦争を内乱へ転化せよ」の

ボルシェビキとレーニンは、戦争が勃発するや、直ちに「帝国主義戦争を内乱へ転化せよ」の内容とする声明を発表した。

「現在の帝国主義戦争を内乱へ転化せよ」ということは、コミューンの経験によって支持され、パーゼル決議(一九二二年)がその輪郭を示し、高度に発展したブルジョア諸国間の帝国主義戦争のすべての条件から出てくる、ただ一つの正しいプロレタリア的スローガンである」(『戦争とロシア社会民主党』全第二一巻P二〇)。

少なくとも、一九二二年までの第二インターは、第一インターを継承し、国際プロレタリアートの共同による各国階級闘争の発展という見地から、戦争問題に対する態度を決めてきた。とくに、パーゼル宣言は、すでにバルカン戦争が始まり、戦争が世界戦争に発展する可能性として生れてきた情勢を考慮して、「この戦争にかんして、労働者が国際的規模で自国政府に反対して革命闘争を行う戦術、プロレタリア革命の戦術」をうちたてている。

ところが、世界大戦が勃発すると、イギリス、ドイツなどの主要な交戦国の社会主義者は、かかる戦術を投げ捨て、「祖国擁護」を主張して自国政府に協力しながら、平和を求めざる戦術をとった。彼らは、「社会主義革命」を防衛するためには、自国資本主義を防衛する必要があるとして「祖国擁護」を主張した。だが、「社会主義革命」を防衛するとは、プロレタリアートを防衛し、階級闘争を発展させることである。「祖国擁護」とは、国内平和によって階級闘争を破壊し、プロレタリアートを戦場に送って殺すことである。その意味では、「祖国擁護」のスローガンは「社会主義革命」を防衛するものではなく、逆に破壊するものである。

狙いの一つは、数千万の人々の前に暴露される「人民と政府の不一致」を拡大させることが第一である。第二に、労働者大衆の革命的気分、行動を、第一の点を踏えて意識化し、深め、それにはつきりした形をあたえることである。

##### ② 自国政府の敗北について

政府間の戦争を内乱へ転化させることは、一方では政府の軍事的失敗(敗北)によって容易にされるが、他方では、そのような転化を目ざして、つまり敗北を促進すべく活動することを要求する。なぜなら、政府に対する革命的行動とブルジョア政府間戦争での自国政府の敗北の促進とは不可分の相互関係をもっているからである。

ところで、トロッッキーは、「勝利でもなく敗北でもない」というスローガンを提起して、この「自国政府の敗北」に反対した。彼には、ロシアの敗北はドイツの勝利に、ドイツの敗北はロシアの勝利に写ったのである。それは、階級的視点をもたず、国家間戦争、したがって「自」国の見地から戦争を見ていたからである。彼のスローガンは実際は、「国内平和」であり、あらゆる交戦国の階級闘争の放棄を意味する。

レーニンとボルシェビキの提起した「自国政府敗北」の主張は、自国政府に対する革命的行動を戦時において継続するものである。「戦時に自国政府にたいして革命的に行動するということは、疑いもなく、争い余地なく、たんに自国政府の敗北を希望することだけを意味するのではなく、さらに、実際にこのように敗北を促進することを意味する」(『帝国主義戦争における自国政府の敗北について』全第二一巻P二七八)。そしてこれは、「自国政府と自国



国ブルジョアジーとを打倒するため、プロレタリアートが政府とブルジョアジーの困難を利用する政策で」(同P二八二)もあった。これがプロレタリア国際主義の精神にもとづいていたのは、「すべての交戦国政府に対する共同の革命行動」「すべての交戦国における革命運動がたがいと呼応し協力する」(同P二八〇～二八一)、戦術だった、すなわち「すべての国のブルジョアジーにたいするすべての国のプロレタリアの革命戦争」(「戦争とロシア社会民主党」L全第二一巻P一八)の戦術だったのである。

### ③ 旧来の三つのスローガンとの関連について

「どれよりも正しいのは、『三つの柱』(民主共和制、地主の土地没収、八時間労働日)のスローガンに、社会主義のための、交戦国政府の革命的打倒のための、そして戦争に反対する闘争での、労働者の国際的連帯性の呼びかけを付加したものである」(「いくつかのテーゼ」L全第二一巻P四一六)。

## 2 内乱を促進する具体的活動

「今日の帝国主義戦争を内乱へ転化させる途上の第一歩としては、次のことをあげなければならない。(一)軍事公債への賛成投票を無条件に拒否し、ブルジョア内閣から脱退すること。(二)「国内平和」の政策と完全に手をきること。(三)政府とブルジョアジーが戒厳令をしき、憲法上の自由を廃止しているところではどこでも、非合法組織をつくること。(四)さんごう内での、一般に戦場での交戦国の兵士の交歓を支持すること。(五)一般に

(五)の提案である

### ④ ②について

当時、第二インターのほとんどの党は「合法諸組織を保持するため、プロレタリアートの革命的な犠牲に」(「現行の警察法によってゆるされている組織というあじ豆のあつものと引換えに、プロレタリアートが革命をおこなう権利を、売りわたす」)、「第二インターの崩壊」L全第二一巻P二五二)てきた。いたるところで武装したブルジョアジーによるプロレタリアートへの弾圧が存在し、また革命的情勢が生れていることと関連して、非合法組織が必要なのだ。つまり、「革命的組織にまつることは必要である。プロレタリアートの革命的行動の時代がそれを要求する」(同P二五三)ということである。

もちろん、非合法と合法の結合が原則である。レーニンは、非合法組織を提起する際、「社会民主諸党は、たとえどんなにわずかでも大衆を組織し社会主義を宣伝する合法的可能性があるなら、どんな場合にも、どんな事情のもとでも、それを利用することを断念しないと同時に、合法性への隷従とは手を切らなければならない」(「社会主義と戦争」L全第二一巻P三二二)と強調している。

### ④ ④について

これは直接的には、第一次大戦中、交戦国の兵士同志がさんごう内で交歓を行っていたことを踏えて、これを支持し、発展させることの提案である。それは、レーニンとボルシェビキの闘い全体から見れば、敵の軍隊を解体し、その一部を革命の側に獲得するための闘

プロレタリアートのあらゆる革命的大衆行動を支持すること」(「ロシア社会民主労働党在外支部会議」L全第二一巻P一五五)。

### ① ①について

レーニンとボルシェビキは、内乱を促進していく活動を、階級闘争のすべての領域で問題にしている。その一つが、議会活動であり、(一)は社会民主議員団の任務をしめしている。

第一次大戦が勃発すると、ドイツ社会民主党の議員のほとんどが軍事公債費に賛成投票し、「自」国ブルジョアジーの排外主義的(「愛国主義的」)スローガンをくりかえし、戦争を正当化して弁護し、「ブルジョア内閣に入り、その他等々」(「戦争とロシア社会民主党」L全第二一巻P一五)を行った。しかし、リーブクネヒトは、国会でもただ一人で、軍事公債費に反対し、帝国主義戦争反対の立場を断固として貫いた。レーニンは、このリーブクネヒトを評価し、モデルとして(一)の主張を提起したのである。ちなみに、第四国会のボルシェビキ議員団は、この方向で活動し、一九一四年十一月に逮捕されたが、裁判等々でも原則を中心に守った。

### ② ①と⑤について

「国内平和」を拒否することは、「主要な敵は自国にいる」ことをはっきりさせ、自国のブルジョアジーと政府と闘争することを意味する。かかる見地から、プロレタリアートのあらゆる革命的闘いを支持し、ブルジョアジーの打倒と政府の獲得、「社会主義」のための革命的大衆闘争を宣伝し、準備し、実現していくことが、(一)と

い、すなわち、ボルシェビキの軍隊工作全体との関連はどうだったのか。

軍隊工作の条件は、近代の戦争(国民戦争)と近代の軍隊(大量性)にある。近代の軍隊は、一般兵役義務制にもとづく膨大な国民を形成し、発展させた。それは、軍隊の中に動労大衆(とくに農民、だが戦時中は労働者が増えた。)の要求、気分を持ち込むことになったのである。また、少なくとも社会民主労働党の党員が兵役にとられたが、ボルシェビキは、「兵役拒否は革命的行動ではない」「武器をとることを拒否するのではなく、武器を自国のブルジョアジーにさしむけること」を主張した。

ボルシェビキの軍隊工作は③軍隊内での宣伝・扇動、④下級兵士の諸要求の組織化、⑤労働者と兵士との交流、⑥兵士細胞の組織化などとして、一九〇二年から行われてきた。もちろん、軍隊の解体のための武装行動も組織している。

提案④の意義は、こうした全体の二環である。

おわりに

分量が、当初の予定をこえたこと、いくつかの制約のため、以下の稿は次号にまわすことにする。ただし、本号の部分だけでも活学活用が可能な構成にしている。

V 一九〇五年革命と一七年革命 II 帝国主義との講和と革命戦争

VI 先進国における内乱の敗北 III 民族解放戦争

IX 光州蜂起の教訓 X 国際ゲリラ戦争

VII 日本における武装闘争

「全員、全ゆる武器を取り、第三ゲートに突入せよ」、十月二〇日、烈々たるアジテーションとともに、中核派を中心とする二五〇〇の部隊が、丸太を先頭とし、鉄パイプ、火炎ビンを手にして、機動隊との白兵戦を展開した。

機動隊員、一五〇余名に負傷を強い、装甲車七台を炎上させたこの闘争は、ブルジョア新聞でも絶叫するように、街頭行動としては規模からすれば、六〇年代後半から七〇年代初頭の闘いに匹敵するものである。しかも十・二〇は、「中曽根打倒」をメインスローガンとして闘われている。

われわれは、以下の文において、ある意味で「歴史を画した」この闘争と、その中で、現われた中核派の欠陥について、分析することにする。

ちなみに、熱田派の十一・一〇集会は、用水問題をとり上げてみれば、明確に用水反対を、宣言し、実力闘争を掲げている。しかし、政治主張上でいえば、反戦・反核闘争のレベルでさえ、ほとんど触れず、新たな局面に入ったといえる。それは、実力闘争（武装）と政府打倒の問題をこの闘争が押し出したことによる。

つまり、三・八前後は「石橋、内田問題」や、石井英裕氏問題に代表されるように、反対同盟や支援の目は反対同盟の組織の強化に注がれていた。したがって論争の軸も、大衆運動との結合のあり方をめぐって、さらに農民の革命の側への獲得にあった。（ところがそれは、一坪共有化という「戦術」をめぐって、両同盟のどちらが正しいか、に歪曲されていた）われわれは、分裂を中核派の急進民主主義の政治の破産と第四インター等の経済主義の開化と、とらえ分裂の固定化に反対し、独自の働きかけを行うことをつうじて、自らの任務をはたそうとしてきた。このこと自体は、今も変わりがない。しかし、この間の状況は、われわれに指導の転換を要求している。

八四年秋ごろより、中核派、戦旗（西田）両派は、各闘争課題において、積極的に街頭行動をとり始めている。三里塚においても集会後のデモや用水阻止闘争で、機動隊との実力攻防を行い、被逮捕者は、九月以降だけでもすでに一二四名を数えている。

このような気運を十・二〇は大きく促進したといえる。しかも、中核派は、今回の闘争を「中曽根打倒／戦争国家粉砕」のスローガンでやり抜いている。つまり、今回の行動によって、大衆的なレベルで、再び武装の問題や政府打倒、そしてそのあり方をめぐってに大衆の関心は集まり出しているといえる。このことは、八五年秋社共が、中曽根内閣打倒を全面方針として掲げたこととも、関連がある。

われわれは、この「新たな局面」に立ち遅れることなく、流動に

れられなくなっている。（例えば、一〇・二七反核集会への反対同盟の不参加）、つまり、戦闘化しているとはいえず、現地攻防に収斂していく傾向にある。これは、北原派が「中曽根打倒」を全面におしたてて、「二期決戦を闘おうとしている」と、大きな対比を見せている。

われわれは、三・八以後、「三里塚闘争の現局面と我々の任務」などで、北原派が動員力で、熱田派を凌駕し始めたこと、その要因として、中核派が「脱落派批判」という形ではあれ、資本主義改良、社共追隨の第四インター等との党派闘争をやり抜いてきたこと、熱田派の中にブルジョア思想が、公然と浸触し始めたことを分析してきた。

秋の二つの集会は、この結果による両派の対比を、あらためて浮きぼりにするとともに、現実において、熱田派の「むらの再生、闘う農業」路線に転換をせまり出しているといえよう。

さて、十・二〇をつうじて、三里塚闘争は、三・八分裂以後よ

分け入っていかねばならない。

### Ⅰ 中核派の中曽根打倒闘争について

現在、中核派は、三里塚二期決戦＝革命的武装闘争という形で、帝国主義の諸政策に対する反対の闘争を戦術上のエスカレーションを目的意識的に追求することをつうじて、内戦を実現する、という「革命への道すじ」をえがいている。彼らは、八五年一・一アピールで「反帝大衆決起」を主張し始め、反核闘争や杉並選挙をつうじて、人民の決起を呼びかけた。その政治内容は、中曽根による「戦後の獲得物の一切」への破壊に対する抵抗であり、「戦争に対する人民の根源的怒りを掘り起こす」ことである。

したがって、今回の十・二〇闘争も（その後の千葉動労のストライキも）政治上は、かかる主張の延長上にある（現在、革マル派が機関紙上で、革命的武装闘争＝対カクマル戦を唱える高木一派と反帝大衆運動主義の陶山一派との分裂として政治的弥縫を分析しているが、これは、革マル派の思念の産物である）。

今回の十・二〇闘争においては、中核派は「中曽根打倒／戦争国家粉砕」を全面スローガンとしていた。大衆の自然発生的な噴激をとらえて、政府や権力にその矛先を向けていくことは、それ自体においては、まったく正しいことである。しかし、そのことを、資本主義制度やブルジョアジーの政治独裁への批判を結びつけることなく、「戦争政治、機動隊政治」として、一面化していくことは誤っている。これは、中核派が政治主張上においては、社共と同様に戦後の「平和と民主主義」（それは国際政治の特殊状況から生ま

れたものである)を基準とする、もの見方に足をすくわれていることを意味する。

彼らが、反中曾根の気運に乗り、中曾根打倒の政治的内容として持ち出したものは、だから、諸階級、諸階層の動向―反中曾根・ブルジョアジーや社共トを分析し、その中でプロレタリアートの焦眉の任務を導き出すのではなく、彼らの先制的内戦戦略の中に、中曾根打倒を戦略化して組み入れち密化することであった。

中核派は次のように主張している。「中曾根打倒は、日本革命達成にとって、媒介的綱領的課題と化している……いわば、中曾根打倒は、限りなく日帝打倒を引き寄せる戦略コースなのである。」  
「中曾根政権崩壊のあとには、そのレベルで中曾根に代わりうるものはいない、中曾根は、日帝一〇〇年の歴史的、伝統的、今日的な全反革命エネルギーを結集しつつあり、これを真正面から激突して爆砕することは、日帝を未曾有の混乱と危機と敗北過程に、たたきこむことになるだろう」(「前進」一二五号)。

なんたるし意的な図式であろうか。中核派がこういった論理をもち出す背景には、彼ら獨特の帝国主義批判と内戦に対する考え方があつた。つまり、帝国主義の現在の動向を一九三〇年代へのらせん的回帰として「対ソ対決―帝間争闘戦」激化のコースへのテコを「民間反革命の育成―ファシズム体制への移行」としてはることである。そのため、彼らの論理によれば、中曾根内閣は、三〇年代型の政治構造へのブルジョアジーの飛躍をかけた最後の政権ということになり、これを打倒することは、帝国主義の延命の根幹を打ち砕き、ブルジョア政治を瓦解させることになる。

「三〇年代型の危機への情勢の進展の中で、我々の戦略がこれに間

に合うかどうか?」(同)、これが今回の彼らの闘争であった。

確かに、中曾根がブルジョアジーの意をうけて、軍拡・反革命を行って居るのは事実である。そして、矢継早に攻めの政治を展開し、民主主義を蹂躙しているのも事実である。しかし、「戦争・反動・抑圧」は帝国主義の時代の一般の特徴である。ただし、このことから歴史をアナロジーして三〇年代型ファシズムへの過程と図式化して、結果的に個々の反動政策との対決のみプロレタリアートを没入させるのは誤りである。現在の中曾根の政治は国境をこえた巨大な独占体を形成しつつある日帝ブルジョアジーが、国際的な舞台で新たな諸関係を持ち始めたことに起因している。反動の諸結果とのみでなく、その原因と闘うことが求められている。

彼らの誤りは、「火花」四六号「反戦、反核、反安保と中核派の帝国主義批判」で触れているように、帝国主義の基礎が独占資本主義にあることや、独占非独占間の矛盾や独占資本間の諸利害の矛盾が政策として反映されることを理解していないことにある。

現在、自民党各派や社・公などがポスト中曾根をにらんで、各ニユーリダーを押し立て、諸階層の利害を反映した政策をとらんとしている。だから、「中曾根打倒」を呼びかける際にも中曾根の反動性のみではなく、いわゆる「戦後の総決算」をめぐる現われている反中曾根ブルジョアジーや諸階級、諸階層(諸政党)への態度とその連関を、同時に分析し、暴露することが必要となってくるのである。

以上のように、中核派の中曾根打倒闘争は、それにとって代る権力の問題について素通りしている。それは内戦の一過程の戦略として、予定調和的に表現されているにすぎない。しかも彼らは内戦の

内容を「中曾根の反動対人民」という図式で問題をたてているため

「反戦・反ファシズム」という自然発生性そのものの上に内戦の基礎を生み出すこととなつてしまつてゐる。(したがつて、彼らはフランスの反ナチレジスタンスも「スターリン主義に歪曲された」との文言以外は、全面的に賛美せざるをえない)

中核派は、この十・二〇中曾根打倒闘争をやり抜いたことで、一定の大衆のシンパシーを集めるだろう。そして第一公園派の「優位」はしばらくゆるがないであろう。

しかし、政府打倒を唱え、大衆の武装を進展させた中核派の客観的に置かれたブルジョア政権に対する位置と彼らの「路線」とがもたらす矛盾は、ますます大きくなるであろう。

## Ⅱ 反政府闘争から政府打倒闘争へ ―ブントの敗北―

政府打倒や武装の問題に端緒的ではあれ、むき始めた闘争をさらに革命的に発展させるために、再び六〇年代後半以降の経験をふりかえつておくことは、是非とも必要なことである。

また現在の中核派が基本戦略として「先制的内戦戦略」を提示し、第二次ブント―赤軍派の「攻撃型階級闘争―前段階武装蜂起」と、ほぼ同じ内容で武装闘争や非合法党建設を押し進めんとしていることから、その限界、弱点を知つておく必要があるだろう。(「火花」第三三三号「先制的内戦戦略批判」参照)

かつて、第二次ブントは「安保粉砕―日帝打倒」のスローガンのもとで「安保の粉砕は侵略と反革命の不統一による矛盾を激成し、

日帝の基盤を崩壊させる」とし、運動の先頭に立とうとした。今日の中核派は、対革マル戦の過程で、非公然と軍事の技術を著しく増強させているとはいへ、論理構造としては同じである。

さて、ここで六〇年代後半の闘いにおいて「反政府闘争から政府打倒闘争へと転じた」とたんに、おおいがたい矛盾として現出した問題を見ていきたい。

六〇年代後半にブント、中核派を中心として高揚した闘争は、東大闘争、四・二八沖繩デー、中電マッセンストに引き継がれた。とりわけ四・二八は五派共闘(ブント、中核、ML、社労同、インタ―)や各大学全共闘を背景として、二万人余の学生、労働者による霞ヶ関占拠闘争として勝ちとられた。ブントはこの街頭戦を領導するために共産主義突撃隊(RG)を登場させた。

反帝統一戦線を実体とした萌芽的な武装によって領導されたこの闘争がつきつた問題は、反政府闘争から政府打倒へと運動の質を飛躍させたことにある。そして、政府打倒闘争へと転化したその時に、国家権力や政府の問題、その基本性格や不可欠なものとしての人民の暴力・武装、革命の軍隊の問題を問ひ始めたということである。

新左翼は、革命の問題を「暴力革命―プロ独」としてきた。そして、プロ独に関してはソビエト・コミュニン全人民の武装を事態とし、内容的にはコミュニン四原則の復権にのつとつていた。ところが、四・二八をつうじて大衆の武装を引き出し、また社共とは独自の階級闘争の陣型をつくり出し、政治へゲモニーを握るにおよんで、逆に自らの政府反対派としての限界につき当たつたのである。これはコミュニン四原則ではその先を一切語り得ないことを意味した。

いりまでもなく革命は、ブルジョア国家機関を破壊し、プロレタリア国家機関を建設することを不可欠とする。つまり革命の軍隊の建設の問題、蜂起の計画の問題であり、さらに五派共闘―全共闘―反戦青年委、武装した住民闘争などのできあいの諸機関をあれこれの意味付与ではなく、権力の掌握―生産・流通の掌握にむけての現実の指導が問われたのだ。そしてそれを指導する党の綱領・戦術の全面転換が求められたのである。

これらの問題をめぐって赤軍派は「政府中枢占拠」―前段階蜂起を主張し、前衛派やアナルコ・サンディカリズムは、「工場占拠―生産管理―蜂起」の革命の「コース」を描くことにとどまった。

さて、では中核派はどうであったか？ 彼らは革命の方法に関しては暴動―内乱を追求し、政治的には社民との革命的共闘と労働者反戦軍団の創出を行っていた。機動隊センメツ、暴動の量的拡大が当面の目標であった彼らは、こういった問題に無自覚であった。

しかし、その後対革マル戦の過程で革命軍をつくり、非公然化を結果的に押し進め、軍事技術をいちじるしく前進させてきたのは周知のことである。ただし彼らは、それを自己の経験主義の範囲で進めている。そのため彼らの軍隊は「対カクマル反ファッショ解放戦争、先制的内戦戦略」という対権力闘争の戦略に封じ込められている。彼らの武装は、そのため労働者大衆から見れば、彼らの戦略の中に運動を統制するものとなっており、労働者階級の団結を一方で弱める結果となっている。この点でも彼らはあまりにも新左翼的である。

### III 中核派の「内戦」について

「プロ独・蜂起の準備の中心は、プロレタリア前衛部分の統合、労働者階級の「多数者」の獲得と非プロレタリア階級の前衛部分として労働者階級が登場するための方策である。現在の武装闘争は、その中に厳格に統制されなくてはならない」（『火花』第三三号）

中核派は現在「無制限無差別の極限的ゲリラ戦」（八五年一・一「ピール」）を主張し、自民党本部ゲリラ、空港関連施設の破壊、公団幹部宅への攻撃、最近では国電ケーブルに対するゲリラを行い、革マル派や第四インターに対するテロルを行使してきた。これは一面ではブルジョアジーや敵对党派に対しては十分な脅威となっている。

これは軍事的には十分に評価しなければならない。ところで、そうであればこそ、「労働者の多数」を味方にひき入れるためには、武装闘争の対象や方法は、厳選されるべきである。それは、内戦においては、なかに実現させるのか、敵は誰なのかを明確にすることがあらゆる面で要求される。

戦争は政治の延長である（勝利したゲリラは、一方ではもともと戦闘に有利な条件を選ぶとともに、その対象を政府要人、政府機関、大資本、外国買弁資本、軍事施設等に絞る努力をしている）

中核派の場合、内戦を三里塚、国鉄決戦―革命的武装闘争の戦略の枠の中で個別課題の「永続的内乱の発展」（徹底抗戦、戦術の「エスカレート」）を唱えてこれを行っている。党派闘争もこれを基準にして「反革命との闘争」（彼らに党派闘争の概念はない）としてやっている。そのため労働者階級の団結という点から見れば、非常に

一面的で曖昧なものとなっている。

もちろん、われわれは、第四インターのようにかかる武装闘争の小児病的な形態やその結果を反動的に宣伝し、プロレタリアートの武装そのものに反対していくようなやからとは無縁である。

革命の問題は、国家機構の破壊とプロレタリア権力の組織の問題である。中核派が現在の戦略戦術観から脱脚しない限り、彼らは労働者大衆の自然発生的な噴激の一部しか代表し得ないだろう。

以上「中曽根打倒闘争」をめぐって中核派の批判を行ってきた。中核派が中曽根打倒闘争を主張し、それをプロ独・内戦の準備と結合させんとしていることは、正しいことである。しかし問題はその内容である。つまりなにを実現させるのかをはっきりさせることである。

十・二〇闘争が国家権力と闘かおうとする多くのプロレタリアートを鼓舞したことは疑いない。そして冒頭でふれたように先進的なプロレタリアートの論争は、国家権力との闘いをめぐったものに、その軸を移すだろう。

われわれは、かかる流動の中で、労働者宣言や社会主義理論プログラムでも触れられている労働者の未来（労働者統制、社会革命の問題等）も考慮し、プロレタリアートの権力の樹立とその内容をめぐる論議を全面的に発展させねばならない。と同時に国家権力との攻防に備えて組織の強化を急がねばならない。

先進的プロレタリアート・共産主義者の  
思想的統合を目指す理論的武器  
火花  
を定期購読しよう！  
月刊 毎月1日発行 定価300円  
年間定期購読料3600円 送料別

ロシア社会民主労働党プラハ全党協議会とはなんであったか

—レーニンの組織・戦術観の復権のために—

目次

はじめに

第一章 プラハ全党協議会はこれまでどのように評価されてきたか

(一) いわゆる正統派の見解

(二) 反レーニン主義者たちの見解

(三) 中間派の見解

第二章 プラハ協議会に誰を党外にあるものと決議・決定したのか

(以上五〇号)

第三章 解党派とは何か

(一) 解党派とは何か

(二) 解党派はなぜメンシエヴィキから発生したのか

(三) 解党派のいう「公然たる労働者政治組織の建設」とはなにか

ローコフ論文の計画

(四) 解党派によるヘゲモニー思想の放棄

(五) 解党派とはなにか——まとめ

(以上五一号)

第四章 解党派にたいするレーニンの闘い——歴史的跡付け

(五二号)

第五章 プラハ全党協議会の今日的意義

(本号)

第五章 プラハ全党協議会の今日的意義

(一)

既に第一章でみたように、いわゆる正統派にせよ、いわゆる反レーニン主義者にせよ、プラハ全党協議会を一九二一年の第一〇回党大会における分派禁止決議と結びつけるかたちで、分派問題という角度から評価していた。いわゆる正統派はここから、分派のない、一枚岩の党があるべき党、レーニン主義の党であるという結論を導き、他方、いわゆる反レーニン主義者たちは、党内民主主義の強調から分権主義と個人主義とを主張していた。こうして民主と集中、自由と規律、個人と組織等々の形式的で無内容な二項対立が延々ととりあげられてきたのである。

だが、プラハ全党協議会の意義を、したがって解党派問題を、分派問題という角度から論じるのはこの核心をついたものではない。分派問題というのであれば、第一に、第二回党大会から、解党派をめぐる党内闘争にいたる対立の全歴史過程を問題とすべきであるし、また第二に、ポリシエヴィキ党内の一連の分派闘争——ブレ

ストーリートフスク講和をめぐる党内闘争、労働組合論争等——を問題とすべきであろう。またとくに、第二の分派闘争については、権力を掌握した党における党内闘争——分派闘争の問題として、特別の分析を必要とするであろう。これにたいし、プラハ全党協議会——解

党派問題は、既に述べてきたように、労働者階級に基礎をおく種々の労働者党の党派闘争の問題としてとらえるべきであろう。解党派は共産主義を目指すプロレタリアートの独自の党とは別の労働者党であった。

その後の歴史過程は、種々様々の労働者党を生み出したのである。かかる諸々の労働者党との党派闘争を闘い抜く中で、共産主義を目指すプロレタリアートの独自の党を建設していく課題が共産主義者に課せられたのであった。小ブルジョアジーの諸党や自由主義的ブルジョアジーの党との党派闘争と並行してこうした諸労働者党との党派闘争が闘われなければならないという事態は、従来からの党派闘争の質を変化させずにはおかなかつたし、それはまた当然であった。諸階級間の区分は万里の長城によって区切られているわけではないとしても、同じ労働者階級に基盤を持つ党である以上、賃労働制の改変をなんらかのかたちで目的とするわけであり、それ故賃労働制の何たるか、商品生産——資本制生産の何たるかをめぐって党派闘争が展開されねばならないからである。

このように解党派にたいするレーニンの闘いを総括し、教訓化せんとすることは、とどのつまり共産主義者の党とはなにか、共産黨員とはなにか、を問うことである。レーニンが解党派を党内の一分派ではなく、別の党であると規定したメルクマールは、非合法党——非合法地下組織の否認にあった。これは換言すれば、当時のまたロシアの諸条件においては、このことが共産主義者の党、プロレタリ

アト独自の党のなんたるかのメルクマールであったということ物語る。だからこそレーニンは、非法党ということについて、カデット党との対比をおこなうことによってより鮮明にこの点をつきだしたのであった。

「社会民主党においては」合法組織は、非法細胞の思想を大衆のなかに導き入れるための拠点である。・・・社会民主党は「全体として」も、各細胞としても、また——もっとも肝心な点だが——革命を宣伝し準備するその活動の全内容においても、非合法的である」（「非合法と合法活動」『全集』Vol.18 p.422）  
「革命を宣伝し準備するその活動の全内容においても、非合法的である」ということの内容をしっかりとつかまねばならない。これは、ツァーリ専制がどんなに穩健な労働組合をも、また自由主義的ブルジョアジーの党であるカデットをも非合法化しているということにかんじて言われているのではない。それはプロレタリア革命の綱領＝共産主義革命綱領の根本性格において述べられているのである。プロレタリア革命は商品世界を根底的に転覆せんとする革命であり、ブルジョア世界＝ブルジョアジーを生みだす一切を廃絶せんとする革命である。このプロレタリア革命を目指す党が「ブルジョア法体系からすれば根本的に非合法法であることは自明である。「カデット党にとっては、彼らの党の禁止、党の非合法化は、偶然であり、「変則」であり、遺物であり、主要なもの、本質的なもの、基本的なものは、彼らの合法活動」というのには、共産主義を目

指すプロレタリアートの独自の党にとっては非合法活動のほうこそ主要なもの、本質的なもの、基本的なものであり、これにたいして合法性は非合法活動の拠点、テコといったものである。レーニンの時代のロシアにおいては、この分界のメルクマールが非法地下組織を認めるのか否かであったわけである。

では今日のわれわれにとって、共産主義を目指すプロレタリア党のメルクマールは一体なにか？共産党の党員はなにをめぐって分界されるのか？種々様々の労働者党が——しかもプロレタリア独裁も認め、非法組織も非合法活動も認め、武装闘争も認める種々の労働者党が乱立するなかで、一体なにをもって分界線を引くのか？

(二)

われわれは現在、新たなインタナショナル建設を掲げ、国際共同行動を含めた様々のレヴェルの国際的活動を結びつけた、国内の共産主義者の党的諸組織、グループを統合する闘い——日本における真の共産主義者の党を建設する党大会の組織化を目指して闘っている。だれが真に統合にむけてともにすすむべき組織、グループなのか、だれがそうではなく、批判し圧倒しぬかねばならない組織、グループなのか。われわれはこの闘いにおいてはわずかの蓄積を有するのみである。

だが、この点については稿を改めて論じよう。

(国崎峻)

火花 総目次 刊月号 (1981年5月) ~ 第52号 (1985年12月)

\* 刊月号 (81.5) \*

・ポーランド労働者の決起に呼応し、帝国主義の侵略・抑圧・反革命を粉砕せよ！

・社・共等の日和見主義と闘争し、「改憲」「安保再改定」を粉砕せよ！

・「安保再改定」攻撃とプロレタリアートの階級闘争

・「日朝連帯」とプロレタリアートの任務

\* 第2号 (81.6) \*

・反「安保」改憲「闘争とプロレタリアートの任務

・大規模対策に名をかりた成敗令体制準備！全国緊急道路網指定！をうらぐだこう！

・人権体制再編攻撃粉砕！一つの朝鮮政策反対！米日「韓」反革命軍事体制打倒の先頭にたち、日朝プロレタリアートの戦闘的団結を勝ちとせよ！

\* 第3号 (81.7) \*

・「政權・治安・軍事・外交」をめぐる闘いとして、同盟・J.C.主権の労働統「策動との闘いを構築せよ！

・「改憲」「安保再改定」にたいする各党派の態度

・中東情勢とわれわれの任務

\* 第4号 (81.8) \*

・帝国主義の侵略・反革命と国際階級闘争

・日本共産党の平和綱領「について

\* 第5号 (81.9) \*

・自然発生性「日韓を組織論化し、またもや登場しはじめている経済主義者の潮流を粉砕し、前進せよ！

・日帝の侵略・反革命戦争準備の環「行政改革策動」にたいするわれわれの態度

\* 第6号 (81.10) \*

・個別闘争と反「安保」改憲「反労働統」とを結合して闘うと同時に、プロレタリアートの国際的統「共同行動を實踐せよ！

・いわゆる「北方領土」問題について

\* 第7号 (81.11) \*

・真に革命的な政治闘争と結合して「準備会」発足を阻止せよ！

・日朝プロレタリアートの戦闘的団結を押し進めよう！

\* 第8号 (81.12) \*

・帝国主義的労働統「に反対する運動（種種の共同行動）のただなかで、プロレタリア世界革命を準備せよ！

・警察権力の再編と弾圧の実態「権力分析 No.1

\* 第9号 (82.1) \*

・西欧諸国の階級闘争はなにをしめしているか？

・ポーランド・「連帯」・クローシは勝利しうるか？

・最近の政治警察による弾圧の一特徴について「権力分析 No.2

\* 第10号 (82.2) \*

・刑法改「正」（保安処分）案の今春国会工程阻止闘争にたち、「障害者」解放運動との結合をかつこう！

・「労働情報」グループは、労働者をどこへつれていこうとしているのか？

・「リムバック82」にたいする自衛隊の現状「権力分析 No.3

\* 第11号 (82.3) \*

・プロレタリアートはなぜ、準備会春闘「統一労働者春闘に反対しなければならないのか？

・「大國主義批判」にたいする大國主義「赤旗」不破論文「スターリンと大國主義」批判

\* 第12号 (82.4) \*

・電話密聴の実態について―権力分析 No 4

\*第25号(83.7)\*

・原水禁運動の破産と今日の「反核」運動

・「反核」のスローガンについて

・監獄法改正―警察拘禁施設制定策動を粉砕せよ！―権力分析 No 5

\*第25号(83.7)\*

・白国国内主義打倒を放棄したイギリス共産党(―日本共産党)―

・フォークランド(マルビナス)戦争

・英ア戦争

・反核運動におけるきまり文句

・労働組合運動―労働運動の非合法化―成敗体制を、合法運動を最大限利用し、非公然―非合法運動の拡大・強化によって粉砕せよ！

・ブルジョアジーの高尚な、しかし心からの説教

\*第25号(83.7)\*

・政治的分岐をめぐる闘い

・行革についての小ブルジョアの幻想

・全半換が直面するもの

・日帝警察権力の特殊部隊の実態―権力分析 No 6

\*第25号(83.7)\*

・米帝ヒイスラエルの侵略徹底弾劾！パレスチナ・アラブ人民の苦難を全世界プロレタリアート・人民の共同行動で突き破れ！

・連合赤軍判決と連合赤軍問題の総括について

・プロレタリアートに「潔さ」を説く中野裁判長をけつして許さない！―連合赤軍裁判判決について

・非組織的な勇気とプロレタリアートの勇気

・内中裁判決の意味するもの

\*第25号(83.7)\*

・PLOにイスラエル承認を要求する日本共産党を許すな！パレスチナ・アラブ人民と連帯して闘おう！

・教科書問題にたいするプロレタリアートのとるべき態度

・情勢分析はどのような見地からなされるべきか―レーニンについての研究メモ

・自衛隊の機構―権力分析 No 7

\*第25号(83.7)特別号\* 第1回代表者会議特集―

・新たなインタナショナル創建・単一非合法党建設の事業をともに

おしすすめよう！

・第1部 綱領(草案)と戦術テーゼ

・第2部 われわれの綱領・戦術・組織について

\*第25号(83.7)\*

・イスラエルはレバノンからただちにでいけ！国際監視軍派遣

・反対！パレスチナ人虐殺徹底糾弾！

・日弁連がすすめる「反対運動」の現状にたいする批判とその教訓

・プロレタリア国際主義をかかげ、「白」国国内主義打倒！―全民

労働協賛―発足阻止を闘い抜け！

・運動報告 A 10.24大阪反核行動 B 10.25狭山再審中央闘争

・「火花」18号までの階級情勢把握の視点について―抜粋ノート

\*第25号(83.7)\*

・28年を進展せよ！

・ほかでもなくプロレタリアートの革命政府を樹立するために革命

的大衆行動を支持し、発展させよ！

・人勧凍結と闘争せよ！

・運動報告 12.14「全民労働」結成

\*第25号(83.7)\*

・真に革命的な朝鮮プロレタリアート・人民との連帯とは？

・プロレタリア国際主義のために―若干の教訓

・在日朝鮮人問題にたいし、プロレタリアートはどういう態度をと

るべきか？

・運動報告 第7回全国労働者集会

\*第25号(83.7)\*

・中国の対ソ和解について

・刑法改「正」・保安処分新設、拘禁―法新設策動を粉砕せよ！

・甲塚闘争討議資料―今回の「分裂」問題にたいするわれわれの

態度の確定にむけて

\*第25号(83.7)\*

・マルクス批判によるマルクス以前への回帰―白川真澄「もう一つ

の革命」批判

・クーデターとプロレタリアートの闘い―権力分析 No 8

・綱領関係文書の公表について

・運動報告 3.22 甲塚集会報告

\*第25号(83.7)\*

・プロレタリアートは甲塚闘争の分裂にたいし、どのような態度

をとるべきか？

・綱領と実際活動 「綱領」観について

・レーニン組織観の復権のために(上) 国崎俊

\*第25号(83.7)\*

・一つの安保闘争の教訓

・いわゆる校内・外暴力から先進的プロレタリアートはいかなる教

訓を引きだすべきか

・夏期カンパ闘争を訴える

・レーニン組織観の復権のために―第2部 国崎俊

\*第25号(83.7)\*

・社・共への追従と「無党派」への迎合

・官停主義対ブルジョア自由主義―三軒教組問題について

・レーニン組織観の復権のために―第3部 国崎俊

\*第25号(83.7)\*

・上田・不破君の奇妙な反省

・築城400年祭に反対する

・運動報告 全陣連8回大会

\*第27号(83.11)\*

・アメリカ帝国主義のグレナダ侵略断固弾劾！アメリカ帝国主義

を公然と支持する中曽根政権弾劾！

・グレナダ・ニュージューエル党の党内闘争とキューバ共産党

・KAL機撃墜事件と「人道主義」

・運動報告 カールビンソン佐世保安港抗議現地闘争 10.21.23

(大阪) 24(東京)集会

\*第25号(83.7)\*

・どのような「道」をすすんではならないか、そして、われわれの

「道」とはなにか 1984年頭にあって―

・不破君―代々木派の綱領観について

・またしても労働官僚どもの裏切り―公務員共闘・日教組の人勧闘

争

・報告 9.15と10.9について(―甲塚)

・伝徳―「革命論」批判

\*第25号(83.7)特別号\* われわれの綱領について―

第1分冊 綱領原則部分前半部の解説

第2分冊 綱領原則部分後半部の解説

第3分冊 ソ連の評論について

第4分冊 帝国主義批判と民主主義問題

第5分冊 「プロレタリア独裁」創刊号、その綱領批判

\*第25号(83.7)\*

・労働運動のブルジョア的歪曲と闘争し、労働者階級の主力闘争を

組織しよう！―28年春闘とプロレタリアートの任務

・第4インター統一書記局ビューロー声明を批判する

・第2回衆院総選挙のしめすもの

・日本共産党の退潮からわれわれはどんな教訓を導くべきか

・「八三実調」阻止―闘いの中間報告

\*第25号(83.7)\*

・PLOの試練とわれわれの意見

・三井三也有明炭鉱の坑内火災事故の教訓とはなにか

- ・自治労「国民春闘方針案」批判  
\*第25号(84.7)\*
- ・いわゆる中進国・サブ帝国主義と呼ばれるものについて
- ・最近の日帝政治警察の弾圧
- ・運輸一般における下部組合員の反乱  
\*第23号(84.5)\*
- ・「先制的内戦戦略」批判
- ・《投稿》 反戦派労働運動について
- ・A研究ノートV 石油問題とマルクス地代論の擁護  
\*第24号(84.6)\*
- ・いま、プロレタリアート独裁・ソビエト運動をどう考えるか? (上)
- ・夏期カンパを訴える
- ・九州蜂起四周年にさいして  
\*第25号(84.7)\*
- ・「国際テロリズム」にたいするブルジョアジイの闘争宣言
- ・反トホーク運動の高揚はなにをしめしたか?
- ・A資料V 六月反トホーク運動でのピラ
- ・いま、プロレタリアート独裁・ソビエト運動をどう考えるか? (中)  
\*第26号(84.8)\*
- ・全斗煥米日反対(阻止)のスローガンについて
- ・A討議資料V 「韓」国の経済情勢と階級闘争
- ・いま、プロレタリアート独裁・ソビエト運動をどう考えるか? (下)
- ・\*第27号(84.9)\*
- ・二つの国家と自主的統
- ・日本共産党のマヌーバ―政治と原水協の内紛
- ・高野総評―平壤日教組の闘いからなにを教訓とするか  
\*第28号(84.10)\*

- ・「階級的労働運動との結合」のスローガンについて ―学生運動の革命的再建のために
- ・肥大化する警察の情報・通信機器
- ・A研究ノートV 労働独裁と永続革命 (4)  
\*第23号(85.3)\*
- ・中米革命の教訓 (上)
- ・拘禁―法反対闘争とプロレタリアートの立場
- ・《投稿》 寄せ場労働運動の路線問題をめぐって
- ・A研究ノートV 労働独裁と永続革命 (5)  
\*第24号(85.4)\*
- ・中米革命の教訓 (下)
- ・寄せ場労働運動の路線問題をめぐって
- ・A研究ノートV 労働独裁と永続革命 (6)  
\*第25号(85.5)\*
- ・英米労働のそりが教えるもの
- ・政治警察との闘争に勝利しよう!
- ・三・二四と三・三一は何を明らかにしたか (三塚塚)  
\*第26号(85.6)\*
- ・「反戦・反安保・反核」と中核派の帝国主義批判
- ・夏期カンパを訴える
- ・またしてもマルクスの名によるマルクス主義の粉砕 (1) 国崎俊
- ・\*第27号(85.7)\*
- ・飢饉はなせなくならないか
- ・同志岡本の帰陣に際しての声明 共産主義者同盟(火花) 中央委員会
- ・政治警察と闘う技術 ―尾行チェックについて (1)
- ・またしてもマルクスの名によるマルクス主義の粉砕 (2) 国崎俊  
\*第28号(85.8)\*
- ・労働者の分裂とわれわれの任務
- ・政治警察と闘う技術 ―尾行チェックについて (2)

- ・イカ釣り漁船問題でしめされた日本共産党の排外主義
- ・求められているのは共産主義革命・革命党建設と結びついた労働運動ではないのか
- ・《投稿》 教育にたいする日教組の思想を批判する
- ・A転載ピラV 全斗煥米日阻止! プロレタリア国際主義を掲げて日本帝国主義を打倒せよ!
- ・A研究ノートV ロシア革命とボルシェビキ (上)  
\*第29号(84.11)\*
- ・「反スタ・トロツキズム」の誤り ―「反帝・労働者国家擁護」と「反帝・反スタ」
- ・社会排外主義と労働運動
- ・カンパ闘争を訴える
- ・A研究ノートV 労働民主独裁と永続革命 (1)
- ・A研究ノートV ロシア革命とボルシェビキ (下)  
\*第30号(84.12)\*
- ・ニカラグア革命とプロレタリアートの任務
- ・三里塚闘争の現局面とわれわれの課題
- ・教育臨調にたいしプロレタリアートはどういう態度をとるべきか ―日教組田中執行部批判
- ・《投稿》 「学生運動と労働運動の結合」をめぐって
- ・A研究ノートV 労働民主独裁と永続革命 (2)  
\*第31号(85.1)\*
- ・自国ブルジョア政府にたいする革命的政治闘争とはどのようなものでなければならぬか
- ・侵略・反革命軍勢力の増進をうたいあげる「防衛白書」
- ・帝国主義的労働統一攻撃の現局面と共産主義者の任務
- ・A研究ノートV 労働独裁と永続革命 (3)  
\*第32号(85.2)\*
- ・米ソ「共同声明」と日ソ共産党「共同声明」はなにをしめしているのか

- ・ベトナムにおける統合への闘い  
\*第33号(85.3)\*
- ・「労働者宣言」(草案)に反対する! ―折衷綱領ではなく、マルクス主義の綱領を
- ・小市民的あわれみの善意と組合主義が生んだ帝国主義的排外主義 ―「労働者宣言」(草案)批判 破照閣 進
- ・AメモV 指紋押捺拒否闘争にたいする一視点 ―プロレタリア国際主義のために  
\*第35号(85.10)\*
- ・南部アフリカ階級闘争の教えるもの (1)
- ・A資料V 9・10 三里塚現地集会ピラ
- ・A研究ノートV ロシア社会民主労働党プラハ協議会とはなんであったか ―レーニンの組織・戦術観の復権のために 国崎俊  
\*第32号(85.11)\*
- ・南部アフリカ階級闘争の教えるもの (2)
- ・社共の「国家機密法」反対の立場とは 関利 徹
- ・治安弾圧の強化と闘いぬこう! 85年代政治警察の実態 河村次郎
- ・A研究ノートV ロシア社会民主労働党プラハ協議会とはなんであったか (2) 国崎俊  
\*第35号(85.12)\*
- ・南部アフリカ階級闘争の教えるもの (3)
- ・「軍事費の1%増突破阻止」のスローガンを闘う 関利 徹
- ・A資料V 革命的政治闘争を組織するために
- ・A研究ノートV ロシア社会民主労働党プラハ協議会とはなんであったか (3) 国崎俊



火 花 第 五 三 号

発行日 一九八六年一月一日

編集発行 共産主義者同盟（火花）

定 価 三〇〇円